慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大正期の日本人によるポール・クローデル受容 : 小牧近江がみたクローデル (2)
Sub Title	La réception de Paul Claudel au Japon de l'époque Taishô : Claudel devant Oumi Komaki (2)
Author	西野, 絢子(Nishino, Ayako)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2021
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.121, No.2 (2021. 12) ,p.68- 81
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	荻野安奈教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01210002-0068

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大正期の日本人によるポール・クローデル受容
小牧近江がみたクローデル（2）

西野　絢子

序

フランス劇詩人ポール・クローデルが大使として日本に滞在していた大正期（1921－27）、当時の日本人はどのように彼をみていたのだろうか。前号では肯定派と否定派の存在を確認し、肯定派の一人、小牧近江をとりあげ、この文学家肌の社会運動家が語ったクローデルについて一部を紹介した。『日本詩人』に掲載された記事には小牧のクローデルに対する文学的理解が色濃く表れていた。本稿ではそれとは対照的に、「社会活動家」としての小牧が「批判と行動」を標榜する自身の文芸雑誌『種蒔く人』に掲載した記事を解読することから始めたい。

「ポオルクロオデル氏の講演に就いて」『種蒔く人』（1923 年 1 月号）

1922年12月2日、小牧近江は吉江喬松とともに、明治記念館においてプロレタリア作家シャルル・ルイ・フィリップ（1874－1909）についての講演会を企画した。小牧はパリの苦学生時代、書店のムニエ夫人[1]に勧められてフィリップの文学と出会った。後に翻訳することになる『小さな町』、『ビュビュ・ド・モンパルナス』など熱心に読み進んだが、1909年に夭折したフィリップと会うことは叶わず、その友人を紹介してもらった程愛読していた。フィリップは貧窮の中に育ったが、小牧が語るように「決してわざとらしく（その）惨めな生活[2]」を描こうとせず、自然な筆致で、民衆への温かい視線があふれる作品を残した。またクローデルによれば、「フィリップは民衆を愛し、これを誹謗して喜ぶような気持ち」は到底ないので、「ゾラのような毒気に充ちたおそろしい空気の中に閉じ

込められていた」彼は「忽ちフィリップの作品を愛することができた」という[3]。

クローデルはフィリップと親交があり、２、３度会い、カトリック改宗を話題とした文通もしていたが、1909年、この若い友人の死を哀しみ、追悼詩をNRFに発表した[4]。1922年の講演会では、クローデルの講演に先立ち、この詩の和訳を日本人女優が、原詩をフランス人教員が朗読した[5]。この詩と講演文は山内義男訳で『日本詩人』第3巻1月号に掲載され、講演の自筆原稿は一部山内宛に、もう一部は小牧宛に寄贈されており、同号に収められている。

小牧は『種蒔く人』の批評欄にこの講演を「大正十一年度最終の日本文壇に投げつけた一つのマニフェスタションとして記憶す可きもの[6]」と記す。

> ポオル・クロオデル氏はブルジョアフランスの代表者である。しかもその大任が、一個人の資格に於いてブルジョア日本に於いてなしたるところの文学的意見は日本のブルジョア芸術家にとつての脅威であらねばならない。(*ibid*.)

このように始まる1頁に満たない短い批評文で、社会主義者小牧は当時の日本における３つの対象、即ち「ブルジョア芸術家」、「信仰作家」、「官憲」に批判の声をむけている。つまりクローデルの講演が、日頃から小牧が注視し主張していることを強調する機会になったのである。例えば『種蒔く人』1922年6月号の社論「芸術における共同戦線」で小牧は「現制度を破壊するために芸術家は何をなすべきや」と問い、芸術家の任務のひとつとして「ブルジョアジイの代弁者であるところのブルジョア芸術家を葬むること」や「プロレタリア芸術の右傾分子――ブルジョア・パシフィスト、リベラリストなど――の仮面を剝ぐこと」と述べている[7]。しかし今回のクローデルの講演は、『種蒔く人』と明らかに立場・主張を同じにする人物の講演を雑誌にも都合よく掲載した、というわけではなく、いわゆる「ブルジョアフランスの代表」で「左よりより多く右に偏した芸術家[8]」の発言が意外にも、雑誌の姿勢に通底するものがあっただけに、ひねりがあり、意義深かったのである。小牧自身、自分が想定した右派の大使クローデル像とこの講演内容とのギャップに驚き、以下のように講演文を引用している。

> （クローデルは）「フランス文学は知識階級の文学であつたといひ、またボリセビキの人々などからブルジョア文学といふ非難を浴びせられたのも無理のないことで

あつた」と億面もなくいつている。フィリップはクロオデルから大きな示唆を受けて彼の生活に大きな転換を行はうと期待していたのであつたが、クロオデルは反つてプロレタリアの出であるフィリップの作品を読んで、彼自身ある真摯な反省をなすべき機会を与へられたと告白している。(*ibid*.)

そもそも『種蒔く人』は特定のイデオロギーに偏った雑誌ではなく、寛容な性質を持っていた。『クラルテ』を見本としていたが、『クラルテ』や他の多くの左翼雑誌のように、「特定の主義・主張にとらわれることなく、みずからと共通した目標を持つ人々にその場を積極的に開放し幅広い運動を目指していた[9]」。例えば、『クラルテ』でロラン＝バリュビュス論争が起こったとき、バリュビュス側の立場に立っていた『クラルテ』の記事をそのまま日本に翻訳して紹介するのではなく、論争の全貌を明らかにするため、両方の立場の全文を紹介していた。つまり渡邊一民が指摘するように「たとえ自分たちに不利な事柄であっても、問題となりうるものはすべて公平にあきらかにするとともに、たとえ味方とみなしえないものでもそこに教訓があれば素直に受け止めるといった（…）読者の自主性を尊重する寛容で民主主義的な姿勢[10]」をもっていたのだ。クローデルの講演についての批評文もこの姿勢に貫かれており、小牧がそこから「素直に受け止めた教訓」どころか、驚きをもって共感したのは、「民衆」に対する考え方であった。

民衆のために＝民衆に代わって

クローデルは、芸術家は「民衆のために＝民衆に代わって」創作すべきだという考えを講演で表明したが、この考えは1905年にヴァレリー・ラルボー宛の手紙 le Rôle du poète dans la cité でも述べていたものである。胸を打たれた小牧は以下のように日本語で講演内容をまとめる。

クローデルはフィリップについて何をいつたか。「フィリップの作品に対するとき吾人は考へさせられる。芸術家は果たして如何なる態度をもつて作に臨むべきか。自分自身の考へよりすれば実に吾人は民衆のために制作しなければならない。但しここに「民衆の為めに」といつた意味は「民衆を目當にして」という意味ではなく、「民衆に代わつて」といふ意味である。吾人は光明に向かつて躍進する民衆の

代言者であらねばならぬ。この意味に於て初めて芸術家の立場といふものの認識が出来ると思ふ。」(*ibid*.　強調は引用者)

「光明に向かって躍進」という表現が含まれる下線部は、やや凝縮された要約のため、原文と山内訳を確認すると、概ね次のような意味になる。光明と自由というのは、民衆が、労働し、苦しみ、忍従することによって支払ってくれているものであるから、それをその作り手でもある民衆を含めた全ての人間で利用すべきだ。そのために、芸術家は虐げられた民衆の犠牲を自覚し、その代弁者となって創作すべきだ、というのがクローデルの考えである[11]。

この「民衆のために＝民衆の代弁者になる」という考えは、小牧だけでなく、石川淳の心も打っていた。「1922年、東京に於いてなされたかれの講演に拠ると、クロオデルは、「民衆の為め」ではなくて「民衆それ自身の立場に」在ってものを云ふ文人である。此の言を親しく聞くことの出来たのは、我々の悦びである[12]。」

信仰作家と官警への批判

小牧は、民衆に代わって創作する態度を解くカトリック作家クローデルと日本の信仰作家とを区別し、後者を糾弾する。

> クロオデル氏は何人も知る如く非常なカトリック信者である。だのに、日本で多く見るような宗教気分の卑劣な作家とは自らその進むべき道を別にしている。日本の宗教作家の多くは各自勝手な宗教といふものを創つて、その中に回避しやうとする。それでいい気でいる。彼等にとつて民衆なんかはどうでもいいんだ。(…)(クローデルは)あれだけの反省をもつている。日本の信仰作家の頭はどうだらうか。(*ibid*.)

ここで小牧が「宗教作家」、「信仰作家」と言っているのが誰なのか具体的に示されてはいないが、同時代の詩人で『種蒔く人』創刊号の執筆者として名を連ねている、川路虹行の記事を参照すると、当時「流行」していた賀川豊彦や倉田百三の作品が批判されている。「宗教的」「人道的」な思想は否定しないが、『死線を越えて』も『出家とその弟子』も、「低劣なセンチメンタリズムで」安易に人

を感動させる点は糾弾すべきであり、「真の芸術は吾々の生活を明るい光明に導き、生き生きさせるものでなければならない」とし、「この意味からも、クロオデル氏の位置はずつと高いところにあり、そして、真の芸術家である」と述べている[13]。

最後に、『種蒔く人』創刊以来、削除、伏字、発禁などの思想的圧迫を受けてきた小牧は、『日本詩人』の記事とは対照的なやや戦闘的な文体で、「官憲」に対する批判を述べる。

> それからもう一つ官憲にいつて聞かしてやりたい。ポオル・クロオデル氏の様な温順な人でも「民衆に代わつて」のために気焔を吐いているのだ、あたりまへのことをあたりまへにいつているんだよ、解つたかね、常に「プロレタリアのためにの人々」を圧迫しながら、汝ら自らプロレタリアの身分にしてブルジョアの味方をしている者たち。(*ibid*.)

主語を明確にしてリライトするなら次のようになるだろう。「君たち官憲は、プロレタリアのために活動する我々をいつも圧迫しているが、君たち自身、実はプロレタリアの身分であるのに、ブルジョアの味方をしているだけなんだ。そのブルジョアの温順な芸術家クローデルでさえ、プロレタリアも含めた民衆のために、それに代わって創作活動をする、というあたりまえのことを言っているのだ。」訴えかけるような口調の力強い文体、少なくとも『日本詩人』の記事にはみられなかった文体から、小牧の興奮が伝わる。かつてパリで、クローデルと直接の交流はないが、その作品を読み、鑑賞したとき、文学青年の小牧は、その「偉大さ」「力強さ」を発見し、感動し、繊細な印象を『日本詩人』に記した。今東京で、クローデルから講演自筆原稿を寄贈されるような関係となった小牧は、共通の愛読作家フィリップを通じてクローデルの意外な側面を発見した。ブルジョア・カトリック・右派の大使は、小牧の「民衆のために活動する」という「あたりまえ」を共有していたのだ。政治的立場、宗教を超えて、普遍的な方向へと開かれた作家クローデルの真価に気が付いた小牧は力を得て、自分の雑誌で声高に叫んだのである。ある種の偏見に捉われていては発見できないことを、『種蒔く人』の創刊者小牧は明らかにした。同じくフィリップを愛好する島崎藤村はかつて「なぜフィリップのような個人主義者が、伝統的で非・個人主義のクローデ

ルと親交を結んでいたのか分からない[14]」と述べていた。クローデルの講演文や小牧の批評は、このような偏見で閉じた目を開いてくれるかもしれない。

以上、「生涯ブルジョア出身の身であることを否定せず、プロレタリア的生活の経験から知識人の使命をプロレタリアの教化と人道主義に立つ実践的な行動だと唱え、近代日本に国際主義の種を蒔いた先駆的役割を果たした知識人・小牧近江[15]」がみたクローデル像を明らかにした。次に検討したいのは、小牧とクローデルが共有していた「民衆のために」行動する姿勢をまさに反映させた、大正の日本を襲った未曾有の大事件、関東大震災である。

関東大震災を前に

1923年9月1日に東京と横浜を潰滅させた恐るべき大震災と大火災。約百年後の今、改めてこの惨事を「潜りぬけるように生きた日本の作家や詩人や芸術家の足跡をたどる」試みがなされているが[16]、クローデルもこの惨事を日本人と共有した外国人の一人で、特にフランスを代表する重要な立場にある外交官であり、詩人でもあった。無差別に多くの人命を奪った惨劇の中、奇跡的に生き延びた日本人・小牧とフランス人・クローデル。「民衆のために」動くことを志す彼等は、その正義と人類愛からくる態度を実践できたのだろうか。

「炎の街を横切って」（ルポルタージュ）と「9月1日の関東大震災」（外交文書）

正午少し前、激しい地震が発生し、大使館事務所にいたクローデルは外へ出た。火災も発生したが、大使館までは火がまわらないと誤断した彼は、逗子にいる長女の身を案じて車で出発した。橋が壊れていたため、車を棄て、徒歩で横浜方面に向かい、21時頃鉄道の土手で野宿。翌朝横浜に着くとその惨憺たる光景を目に、逗子行きを断念し、埠頭に停泊中のアンドレ・ルボン号を対策本部とし、被災者の救済活動にあたることにする。陸上に出て、領事館の廃墟の前で陣頭指揮をとり、3日、救済の目途が立つと、ようやく逗子へ向かう。長女の無事を確認し、東京へ戻ったのは7日のことであった。以上、クローデルの体験を伝えるのは、彼の私的な日記と、「日本壊滅。一人の証人の印象」というタイトルで『レクチュール・プール・トゥース』誌に掲載され（1924年1月）、後に『炎の街を横切って』と改題されて『朝日の中の黒い鳥』に収録された（1927年）

ルポルタージュと、9月20日付で発信された外交文書（公信第153号）である。

文学テキストであるルポルタージュと、首相兼外相ポワンカレ宛の外交文書には、ほぼ同じ内容が記録されているが、やはり性質上、前者には構成の工夫や詩心が反映され、後者には客観的な視点 —— とはいえたまに文学的 —— から必要な事実を伝える任務を全うする姿勢が貫かれている。また、共通の内容として、友人でもあった領事デジャルダンの死、「最後の審判」のようなパノラマ、最も悲惨な被害を受けた陸軍被服廠跡の様子、外国人も日本人も分け隔てなく救済したアンドレ・ルボン号への敬意などが記述される一方で、双方にそれぞれ、他方には現れない内容があることも指摘したい。例えば震災の文学的ルポルタージュには、公信にはない、大悲劇を前にしたストイックな日本人の高徳な精神性についての分析が含まれており、また、野宿した夜に観た月の光景を詠んだ、クローデルが「俳諧」とよぶ短詩が付いているのである[17]。他方、公信には、ルポルタージュにはない、日本の救助や協力を拒む「無力な状態」や、フランスからの義援金の使い道について等の記述、そしていくつかの追伸がある[18]。ともあれルポルタージュに記された、「アラリックのローマの略奪にも匹敵するかのような大虐殺[19]」である震災の描写が、読者が目を背けたくなるほど真に迫る筆力を持つことは、パリにいて震災を経験していない藤田嗣治が、クローデルのテキストにそって震災光景を描いていることにも顕れている[20]。

外交文書で報告した日本人の「無力さ」と対照的に、日本人を美化しているとも思える、高徳な精神に関する分析をまずルポルタージュから引用したい。

> 地震の日の夜、私が東京と横浜の間を長時間歩いているとき、あるいは生存者たちが群れ集まった巨大な野営地で過ごした数日間、私は不平一つ聞かなかった。人々はまるで両親が発狂してしまった良家の子供たちのように悲しみに満ちた諦めの気持ちを抱いていた。気のふれた親が傍らの部屋であらゆる錯乱に身を任せているときにじっと我慢している子供の気持ちをもっていたのである。（…）根本においては、日本人のストイシズムはおそらく儒教の礼の一形態なのであろう。（内藤訳　53頁）

「我慢している子供」の比喩は数行前の記述、「この国（日本）では人間は、非常に敬われてはいるが、あいにくなことに癲癇もちの母親（自然）の子供のようなものである。」（内藤訳 52 頁）に由来する。犠牲者たちが「助けてくれ」と叫ぶ

のではなく、「お願いします」と慎ましく懇願する声にも、外国人・クローデルは心を打たている。しかし、このような謙虚な日本人観をくつがえすような恐ろしい事件が、実は起きていたのである。

天災から人災へ：朝鮮人虐殺、亀戸事件、甘粕事件、および報道の問題

未曾有の震災発生で混乱した日本社会には、朝鮮人に対する流言蜚語が飛び交い、クローデルの比喩を皮肉に転用するなら「気のふれた親」（＝国土）ではなく「発狂」した子供（＝日本国民）は、自己防衛を理由に、朝鮮人の大量虐殺、南葛飾労働組合員9名の惨殺（亀戸事件）、社会運動家の大杉栄、伊藤野枝、橘宗一少年の暗殺（甘粕事件）を行ったのだ。「天災に次ぐ白色テロの人災がさらに焦土を血で濡らし、絶望と虚無の人心を恐怖をもって脅かし[21]」ていたのである。ここで勇気ある行動に出たのが、小牧をはじめとする『種蒔く人』創刊以来のメンバー、秋田からの竹馬の友、金子洋文と今野賢三である。

『種蒔く人　帝都震災号外』と『種蒔き雑記　亀戸の殉教者を追悼するために』

小牧は1923年3月に外務省を退職し、クラルテ運動に専念していたが、まさに準備していた『種蒔く人』「朝鮮人号」は震災のため印刷所で灰となり、雑誌は休刊せざるを得なくなった[22]。無念の小牧は「朝鮮人虐殺」について抗議すべきだと提案したが、全てがストップした東京では不可能なので、土崎版の振り出しに戻って秋田で終刊号を出すことになり、金子と今野の二人に一任された[23]。そこで10月に発行された『種蒔く人　帝都震災号外』は、すぐ発禁となるが、戒厳令下ですばやく朝鮮人虐殺の不当性を訴えたことで、『種蒔く人』の最後の勇姿となった[24]。執筆した今野は「呪詛すべき事実」を知らせ、「流言蜚語の発頭人」の真相究明を訴えたとともに、9月17日まで中央の新聞がこの事件に沈黙したことや、「巨大権力による言語統制についての抗議の意」も明確にした[25]。

「僕たちはこの口を縫われてもなおかつ、抗議すべき目標を大衆とともにあきらかに見極めなければならない[26]」と『帝都震災号外』で述べたことは、1924年1月20日に発行された『種蒔き雑記　亀戸の殉教者を追悼するために』において明らかになる。ここには亀戸署で虐殺された同志9名の名とともに、小牧と金子が総同盟から貸りた「亀戸労働者事件調査」記録をもとにした9編の告発文が掲

載されている。折しも種蒔く人同人会は内部分裂が明らかになり、小牧と金子の二人だけで執筆した。「僕らは曖昧の裡に葬り去られたこの事件をはっきりした姿をして世に訴えたかったのである。[27]」と編集後記にあるように、この追悼録は金子洋文が、勇気を出し、憤りを殺して、文学的に表現した最高のルポルタージュ文学である。激しい弾圧を受けて惨い姿で虐殺された同志の真実を確実に訴えるために、逆説的に、感情や主観を排除して記述し、発禁にならないように「残酷な情景や殺しの場」は削除したという[28]。結果、「批判と行動」を標榜した『種蒔く人』の「最高級の批判と行動」となり、当時誰もできなかったことを本当に行動的に示した点で、惜しくも廃刊となったこの雑誌の精神を充分に語るものとなった[29]。小牧はILOの国際会議のために1924年6月に渡仏した際、フランス共産党機関紙『ユマニテ』に立ち寄り、『種蒔き雑記』を渡すと、抄訳を頼まれ、それは1924年8月17日と20日に掲載され、国際社会にその惨さを訴えたことになる[30]。

震災ルポルタージュ文学

金子が執筆した『種蒔き雑記』の9編も、クローデルの「炎の街を横切って」も、共に震災ルポルタージュ文学であるが、前者は戒厳令下の必死な告発であり、後者は外国人詩人大使の証言・報告である。この状況の違いは大きく、中身にも反映している。例えば両者とも友人を亡くしたが、震災が原因で亡くなった友人を描写するクローデルのテキストよりも、不当に虐殺された友人を描写する金子の文章は、当然ながら真に迫るものがあり、涙なしには読み切れない。まずクローデルを引用する。

> フランス領事館は文字通りバラバラになり、友人のデジャルダンは悲惨にもその廃墟の下敷きとなってしまった。私が着いたとき、その遺体は荷車の上に横たえられていた。顔はすでに黒ずみ晴れ上がり、両足は捩じ曲がっていた。（内藤訳48頁[31]）

次に引用する「平沢君の靴」は、労働運動家の平沢計七の不審な死を通して、亀戸署で朝鮮人や中国人、社会主義者が一晩に320人殺されたことを報じ、その死体を運ぶ巡査から教えてもらった場所に行って屍を焼いている光景を語る証人の

供述に基いて記されている[32]。

> そこには（…）死骸が投げ出されていた。（…）自分の眼はどす黒い血の色や、灰色の死人の顔を見て、一時にくらむような気がした。（…）自分は平沢君は殺されてしまった、と考えた。その時私はいつも平沢君のはいていた一足の靴が寂しそうに地上にころげているのを見た。「平沢君は殺された」自分はこう信じてしまった。[33]

「奇妙なパニック」：クローデル外交文書の追伸

しかし、小牧が言う所のこの「日本人の対面を汚した悲劇[34]」について、大使クローデルは知らないわけではなかった。先述した9月20日付け首相兼外相R.ポワンカレ宛（公信第153号）の通信に、追伸１として以下のように報告をしていたのである。

> 災害後の何日かのあいだ、日本国民をとらえた奇妙なパニックのことを指摘しなければなりません。いたるところで耳にしたことですが、朝鮮人が火災をあおり、殺人や略奪をしているというのです。こうして人々は不幸な朝鮮人たちを追跡しはじめ、見つけしだい、犬のように殺しています。私は目の前で一人が殺されるのを見、別のもう一人が警官に虐待されているのを目にしました。宇都宮では十六人が殺されました。日本政府はこの暴力をやめさせました。しかしながら、コミュニケのなかで、明らかに朝鮮人が革命家や無政府主義者と同調して起こした犯罪の事例があると、へたな説明をしています。（奈良訳174頁）

また、10月30日付けの外交文書でも「震災で狂乱した日本人による朝鮮人・中国人600人の虐殺と社会主義者24人の虐殺、特に甘粕正彦大尉による大杉栄、内妻伊藤野枝、大杉の7歳になる甥の虐殺[35]」を報告していた。一般のフランス人がこれらのことに触れるのは、新聞報道を通してであるが、例えばユマニテ紙は1923年12月15日、22日に甘粕事件の詳細を載せており、また亀戸事件は上述したように、小牧の抄訳に基づく記事が1924年8月に掲載される。クローデルの震災ルポルタージュが最初にフランス人読者に公開されたのは1924年1月であるが── まさに日本で『種蒔き雑記』が出版された時期と重なる ──、そこにおい

て詩人大使は自分が愛好する日本の汚れた部分をさらすことはしなかったのである。日本人が戒厳令下でぎりぎりの挑戦をして訴えたほどの事件とは慎重に距離を取り、外交官としての仕事と、詩人としての使命を区別したといえる。

フランス大使の人類愛とフランスからの復興援助

勇気ある報道で「民衆のために」行動した小牧に対し、クローデルはどうであったのだろうか。文士として文学作品を発表した一方、大使として彼が被災地日本で成した功績は非常に大きい。震災直後、救済活動に貢献したことは言うまでもなく、10月末にはフランス領インドシナの出資で大使館敷地内に医療慈善施設（給食、託児も可能）を開所させ、「貧しい人たちに歓迎」された（奈良訳200頁）。12月には家をなくした横浜在住フランス人のために横浜フランス共同会館を、1924年2月にはフランス新聞協会の義援金で「子供にも配慮した」天幕病院を開院した（奈良訳　224頁）。これらは国際社会の中で、フランスに対する「評価と感謝」という点でも大きな成果であった。実際、最も早く大規模な援助を提供したのはアメリカであったが、日本国民の感謝は、小規模ながらもまだ第一次大戦後の「悲嘆のさなかにある」フランスが示した援助に集中していた。「人類愛」から「寛大な同情心」を起こしたフランスに対する感謝を示す『日日新聞』の記事を、クローデルは外交文書に引用している（奈良訳196頁）。在日フランス国民と日本国民の区別なく両者のために行動したクローデルを突き動かしたのもまたカトリック詩人の人類愛であったに違いない。

「一年の後」（エッセイ）と「関東大震災の一周年記念」（外交文書）

震災から1年後、東京と横浜の追悼式典に出席したクローデルはまたエッセイ「一年の後」と外交文書を残している。後者に記された「感動的」な慰霊祭にて、「死者を忘れないための証として、一摑みの遺灰をのみこむも者さえいた」（奈良訳　281頁）という報告は、前者では巧妙な比喩と具体性が真に迫る、文学的な表現になっている。「国民全体が何か曖昧な感謝の念に駆られて、自分たちの身代わりとなって死んでいった旗のない軍隊の前に頭を垂れた」この式典では、「息子を失った父親が遺灰の山から一摑みとると、それをぐいっと呑み込んだ。」（内藤訳76-77頁）死者に思いをはせ、無数の犠牲者たちへ呼びかける日本

国民と一体化したクローデルの姿が思い浮かぶ。しかしやはり外交文書には、文学テキストにはない日本社会への批判が付け加えられている。忍耐深い「国民がやってきたことは称賛に値しますが、一方それを導く行政の行ったことは、名誉といえるものではありません（…）政治家たちはおのれの無力さを見せつけ、あるいは辻褄の合わない言動や背信行為を行い哀れなざまでしたから（…）称賛することはできません」（奈良訳283頁）外交文書は当時の一般国民に公開されるものではないが、ここにあらわれるクローデル大使の批判的な声は、種蒔く人・小牧近江のそれと響きあう部分がある。

以上、小牧がみたクローデル像を紹介し、二人に共通した「民衆のために」行動する態度を検討した結果、クローデルがみた当時の日本社会・日本人像も浮き彫りになった。震災5周年の1928年9月『文芸戦線』に発表された小牧の「戦争と流言」は1924年1月に書かれたものであるが、「空前の震火災であれだけの流言の辛い経験をなめた僕らは、それとは別個なものでないところの戦争の流言について、考えておく必要がある[36]」と未来への警笛をならしていた。民衆のために光明へ向かう小牧とクローデルの視線は常に前向きである。悲惨な第二次大戦後にクローデルが書いた『日本への惜別』は次の聖句の引用で終わっている。「主は諸国の民を不滅のものとされた」（内藤229頁）。

本研究はJSPS科学研究費（18K12345）の助成を受けたものである。

註

1　クローデルも知り合いであるムニエ夫人の書店は文学サロンの様な場を提供していた。高村光太郎、島崎藤村も訪れたが「小牧ほどフランス語がうまい日本人はいない」と語った。

2　小牧近江「フィリップとギョマン」『ゆかり』親仏文藝会、改造社、1924年、142頁。

3　ポール・クローデル　山内義男訳「シャルル・ルイ・フィリップ」『日本詩人』第3巻1月号、1923年、９頁。

4　Paul Claudel, « Charles-Louis Philippe » in *Œuvre poétique*, Paris, Gallimard, 1967, p.

435-436.

5 『日本におけるポール・クローデル』── クローデルの滞在年譜 ──、中條忍監修、クレス出版 2010年、110頁。

6 小牧近江「ポオルクロオデル氏の講演に就いて」『種蒔く人』1923年 1 月号、48頁。

7 渡邊一民「『クラルテ』と『種蒔く人』」、『フランスの誘惑 ── 近代日本精神史試論』所収、岩波書店、1995年、66頁。

8 小牧近江「ポオルクロオデル氏の講演に就いて」『種蒔く人』1923年 1 月号、49頁。

9 渡邊　前掲書、55頁。

10 渡邊　前掲書、69－70頁。

11 « Et ma réponse personnelle est qu'il faut en effet écrire pour le peuple. Mais pour ne signifie pas forcément dans l'intention de. Une œuvre qui est écrite dans l'intention d'un public quelconque sera toujours une œuvre manquée. Pour signifie à la place de. Il faut que l'écrivain songe toujours qu'il est le représentant de tout un peuple, son délégué à l'intelligence, qu'il profite dans l'intérêt de tous de cette lumière et de cette liberté qu'un peuple obscurci au-dessous de lui paye de son travail, de sa douleur et de sa servitude. » Paul Claudel, « Charles-Louis Philippe » in *Œuvres en prose* (*Pr.*), Paris, Gallimard, 1965, p.540-541. 以下、山内義男訳「そして私個人の之に対する答はといへば、実に吾人は「民衆のために」書かなければならぬといふことである。然しここに「民衆のために」といふのは、必ずしも「民衆を目當てとして」といふことを意味するものではない。何によらず公衆といふものを目當てにして書かれた作品は、常に必ず失敗に終わるであらう。私が此処で「民衆のために」といふのは、即ち「民衆それ自身に代わつて」といふ意味である。作家は常に彼が民衆全部の代表者であり、その知識に向かつての代表者であり、そして自らの下に在るあの暗憺たる民衆が、労働し、苦しみ、忍従することによつて支払つてくれるところの此の光明と自由とは、常に之を凡ての者の利益の為めにのみ愛用すべきものであるといふことを忘れてはならないと思ふ。」「シャルル・ルイ・フィリップ」、『日本詩人』第3巻1月号、1923年、10頁。

12 石川淳「クローデルの立場」『日本詩人』第3巻4月号、1923年、71頁。

13 川路柳虹「クロオデル、その他」『新潮』1922年2月号、96－97頁。

14 島崎藤村「若きフランスの二作家 ── フィリップとペギー」『時事新報』1906年7月11日。

15 李修京『近代韓国の知識人と国際平和運動 ── 金基鎮、小牧近江、そしてアンリ・バリュビュス』、明石書店、2003年、136頁。

16 岡本勝人『1920年代の東京　高村光太郎、横光利一、堀辰雄』左右社、2021年。

17 短詩の初出は詩集『惨禍の上に』詩話会編纂　新潮社　1923年11月。その後1927年出版の『朝日の中の黒い鳥』所収。Cf. 根岸徹郎「クローデルと日本文学」──「1923年9月1日　東京と横浜の間で」あるいは「俳諧」を手がかりとして」*L'Oiseau*

Noir, Revues d'études claudéliennes, XV, 日本クローデル研究会、2005年、61－62頁。

18 ポール・クローデル『孤独な帝国　日本の一九二〇年代――ポール・クローデル外交書簡一九二一－二七』奈良道子訳、草思社、1999年、168頁。以下外交文書の引用は「奈良訳　頁数」の形式で表記する。

19 クローデル「炎の街を横切って」『朝日の中の黒い鳥』所収、内藤高訳、講談社、1988年、50頁。以下引用はこの訳本に従い「内藤訳　頁数」の形式で表記する。

20 藤田は1927年10月にエクセシオール社から出た『朝日の中の黒い鳥』限定豪華本に銅板による日本風俗画27点をつけた。Cf. 林洋子『藤田嗣治　作品をひらく』名屋大学出版会、2008年、244頁。

21 金子洋文『種蒔く人伝』労働大学、1984年、54頁。

22 北条常久『種蒔く人　小牧近江の青春』筑摩書房、1995年、226頁。

23 金子　前掲書、53頁。

24 大和田茂『社会運動と文芸雑誌――『種蒔く人』時代のメディア戦略』青柿社、2012年、55頁。

25 李　修京「関東大震災直後の新聞報道と"種蒔き社"の行動」『フロンティアの文学――雑誌『種蒔く人』の再検討――』所収、論創社、2005年、84－85頁。

26 金子　前掲書、40頁。

27 金子　前掲書、100頁。

28 金子　前掲書、101頁。

29 金子　前掲書、92頁。

30 1924年8月4日から3日間と小牧は語っているが、gallicaによれば実際は8月17と20日に掲載、記事はRené Reynaudの名になっている。

31 « Le Consulat français s'est littéralement dissous, ensevelissant sous ses ruines mon pauvre ami Déjardin. Je l'ai retrouvé étendu sur une charrette, la face déjà noire et tuméfiée, les jambes tordues. » Paul Claudel, « A travers les villes en flammes », *Pr.,* Gallimard, 1965, p.1133

32 李　前掲書、85頁。

33 金子　前掲書、156頁。ユマニテ紙に仏訳された該当箇所の一部を引用する：« -Est-il vrai que vous avez tué tant d'hommes ? Où les avez-vous tués ?-C'est du côté de la rivière Komatsu. C'est en se rendant à l'endroit que lui avait indiqué le policier que le témoin retrouva et reconnut les chausseurs de son ami. »« Comment furent assassinés nos camarades japonais » , *L'Humanité* : journal socialiste quotidien. 1924-08-17. Source gallica.bnf.fr/Bnf

34 小牧近江「戦争と流言」『文芸戦線』５巻９号、1928年、77頁。

35 首相兼外相R.ポワンカレ宛（公信第171号）前掲・『日本におけるポール・クローデル』、189頁。

36 小牧　前掲論文、85頁。